

## 音楽を通した交流が伝える日本・アンゴラ文化外交

2016年7月

在アンゴラ日本大使館 三浦佳子

2016年5月、アンゴラのカポソカ音楽学院の生徒34名が19日間の日本ツアーを実施しました。カポソカ音楽学院には、2012年の草の根文化無償資金協力で楽器整備支援を実施したほか、2014年及び2015年の在アンゴラ日本大使館主催の文化事業として日本人音楽家を招き技術指導の支援をしてきました。技術向上の成果発表の場として開催した公演には、当国文化人の他に国会副議長や与党副総裁ら政府要人も来場し、日本のアンゴラにおける文化支援活動は広く知られるようになりました。日本とアンゴラの外交関係樹立40周年である本年、大統領の支援によりカポソカ音楽学院が訪日を果たし、日本の子供たちと音楽を通じた交流を行い、5つの都市(東京、相馬、松本、仙台、広島)で公演を実施するなど、これまでの文化交流の成果を日本で発表するという集大成となりました。

カポソカ音楽学院では創立以来、4歳から21歳までのアンゴラ人児童・青年を対象に、日本のスズキ・メソードを学んだフィリピン人教師が弦楽器を教えてきました。今回の訪日では、スズキ・メソードの発祥の地である長野県松本市を訪れ、才能教育研究会の講師の方々に直々に教えてもらうという機会を得ました。とても礼儀正しくかつ熱心に練習に取り組んだと講師の先生方に評されるほど、生徒全員が真剣にレッスンを受講しました。

福島県相馬市で活動するエル・システム・ジャパンは、東日本大震災と原発事故の被害に遭った子供たちに音楽を学ぶ機会を通して夢と希望を与えようと相馬子どもオーケストラを立ち上げました。カポソカ音楽学院は相馬市を訪れ、相馬子どもオーケストラの子供たちと交流を深めました。震災によって厳しい状況にさらされ、原発事故による影響を心身共に受けている福島の子供たちと、独立戦争の後さらに27年続いた内戦で国土が疲弊したアンゴラで、貧しい家庭の子供たちが楽器の演奏を通して規律正しい生活を送り非行に走らないようにと、ルアンダ市サンバ行政地区長だったペドロ・ファンソニー氏が始めたカポソカ音楽学院の子供・青年たち。お互いの言語が話せなくとも、身振り手振りで積極的にコミュニケーションをとり、相馬と東京で行った2回の合同コン



真剣な眼差しでレッスンを受ける生徒たち



カポソカと相馬の子供たち  
(前列右から ファンソニー音楽学院長、ヴェヘケニ駐日アンゴラ大使)



合同コンサート後、記念写真

サートを終了した頃には、お互い別れがたいという感情が生まれるほど音楽という共通言語を通して交流を深めました。

仙台及び広島での単独公演に加え、松本ではスズキ・メソードの生徒の皆さんと、相馬と東京では相馬子どもオーケストラと合同コンサートを開催しました。バイオリンを担当するディアンビ・ジンガさんは、「スズキ・メソードを学ぶ小さな子供でも上級のスキルを身につけているので驚いた」と松本の子供たちとの共演について話します。コンサートマスターのクリスティアーノ・ダ・コンセイサオンさんは、「松本での合同公演は日本での最初の公演だったので、レベルの高い日本人聴衆の前で演奏すると思うだけでとてもドキドキした」と最初の公演時の緊張を振り返ると同時に、「日本での公演を重ねる毎に、聴いている人が誰であれ音楽を演奏することは自分を表す表現法の1つなんだと思うようになった」と日本の大舞台での経験を経ての感想を語ります。演奏者としての精神面での成長がうかがえます。

音楽の技術面の向上という点においても貴重な経験をしました。相馬公演での合同演奏曲の指揮は相馬子どもオーケストラの音楽監督である浅岡洋平氏が、東京での公演では昨年度在外公館文化事業でカポソカ音楽学院を指導した若手チェリスト伊藤悠貴氏が担当しました。指揮者によって同じ楽曲であっても表現も異なればそれを表現するために要求するテクニックも異なり、帰国後に感想を聞かせてくれたカポソカの生徒4人が口を揃えて「指示される弓の動きも全く逆でとても難しかったけど良い経験だった」と言います。指揮者でもあるフェリックス・ダ・コスタさんは、「音楽を奏でることは解釈を伝えるということを学んだ、自分が指揮をしたアンゴラ音楽に対する聴衆の反応がどうなるか心配だったが、観客とのつながりを感じられた」と感想を述べます。「松本のレッスンで学んだ基礎を公演でも生かせたし、オーケストラが公演毎に成長していき、音楽がより流れるようになった」とクリスティアーノさんが言うように、わずか2週間の日本滞在でオーケストラとしての確かな成長が見られました。



(左から)クリスティアーノ、ソライア、ディアンビ、フェリックス



真剣な眼差しの相馬とカポソカの演奏者たち



(左から)浅岡氏、フェリックスさん、伊藤氏

松本でのレッスンや各地公演実施に加えて、プロの演奏鑑賞を通して学んだことがありました。仙台フィルハーモニー管弦楽団の演奏を聴く機会があり、カポソカの生徒たちは生まれて初めて初めてプロの演奏を間近で鑑賞しました。ビオラ担当のソライア・ヴァン・ドゥーネンさんは、「弓の動きや楽譜のページめくりまですべてが同じ動きで、まるでもう何十年も一緒に演奏しているかのようで、あんな見事なオーケストラの調和を初めて見た」と興奮して話します。「演奏後の30数名の生徒の拍手が、会場全体の拍手よりも大きく鳴り響いていた」とファンソニー院長が話すように、生徒たちの感動は大きかったようです。

カポソカの生徒たちは、見学や体験を通して楽器について学ぶ機会にも恵まれました。浜松市にある浜松楽器博物館では、「世界中から集められた楽器コレクションを見学出来たのは貴重な経験で、特にバイオリンの進化は興味深く、また三味線を弾く体験もした」とソライアさんは話します。京都では、京都市立芸術大学の日本伝統音楽研究センターがカポソカの生徒のために特別開催したセミナーに参加し、日本音楽の歴史や日本の伝統音楽で用いられる楽器について学びました。さらに、市比賣(いちひめ)神社では雅楽体験、太鼓センターでは和太鼓体験をしました。「和太鼓はアンゴラの伝統打楽器に似ているので簡単にたたけたけど、体験した後に筋肉痛になった」とソライアさん。



日本伝統音楽研究センターでのセミナー受講



太鼓センターでの和太鼓体験

広島公演後、原爆ドームと平和記念資料館を訪れました。ソライアさんは「資料館に行って初めて原爆の被害があれほどひどいものだったと知った」、ディアンビさんは「日本滞在の中で最も感情を揺さぶられた時間で、その後もずっと、今でさえ、その気持ちが残っている」、クリスティアーノさんは「日本人でなくてもその悲しみは共有できる」、そしてフェリックスさんは「人による行為だということが何よりも悲しい、核兵器を世界から撲滅させなければならない」と、それぞれの気持ちを語りました。またファンソニー院長は、「訪日の機会に広島を訪問出来たことに感謝している、どのようにこのメッセージを世界に伝えていくかが重要」と今後の課題を述べました。



